書き抜き読書ノート 2415	2021 年 7 月 2 日

熊谷亮丸著「パッシング・チャイナ　日本と南アジアが直接つながる時代」講談社 2013 年 3 月 4 日刊を読む

日本人が持つ４つの強み（Ｉ）

１．日本人の強み①…「共存共栄」と思いやり

― 第一に、日本人の最大の強みは、底流に「共存共栄」の思想が流れていることである。「相手を尊重したうえで、自分も生きる」という考え方だ。―

（１）19 世紀末に来日した、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は「日本人の微笑」に、日本人の繊細な心遣いを見ている。以下に、その文章を引用しよう。

「（中略）ほほ笑みは、なにか愉快なことがあればいつでもふるまわれるべきものなのだ。目上の者にであろうと対等の者にであろうと変わりなく。いや、愉快でない時にでさえもだ。それは行儀作法の一部なのである。相手にとって最も感じのよい表情は笑顔なのだ。そして、両親や身内に対しても、先生や友達や好意を寄せてくれる人に対しても、いつでもできるかぎり感じのよい表情を見せるのは暮らしのきまりの一つなのだ」（ラフカディオ・ハーン『知られざる日本の面影』より引用）

（２）①日本人は思いやりのある国民なので、チームワークがいい。

②聖徳太子の昔から和を尊び、人間関係は対立的ではなく、非常に融和的だ。こうした協調的な国民性が世界でも類を見ない安定的な社会を築く基盤になっている。

③中国には、「日本人は一人なら豚だが、三人集まると龍になる。中国人は一人なら龍だが、三人集まると豚になる」という言葉がある。

（３）ビジネスの世界でも日本人は、チームワークを武器に、個々の力が少々劣っている場合でも集団としてはいい結果を出すことが多いのである。

２．日本人の強み②…遵法意識と正義感の強さ

― 第二に、日本人は遵法意識が高く、正義感が強い国民である。―

（１）①歴史的に見れば、その起源は 604 年に聖徳太子が制定した「十七条憲法」にまで遡る。

②鎌倉時代になると、1232 年に、武士の道理を成文化した「御成敗式目（貞永式目）」が作られた。江戸時代に完成した「武士道」については、いまさら説明するまでもないだろう。

③つまり、日本人の遵法意識、規範意識の高さは、終戦後に植え付けられた「付け焼き刃」ではなく、少なくとも 1400 年以上の歴史を持っているのである。

（２）①これに対して、中国は「法治主義」ではなく「人治主義」の国である。形式的に法律は存在するものの、実質的には権力者の胸三寸の統治が行われてきたのだ。

②たとえば、不正蓄財の規模なども、日中両国では対照的である。

③極端な話、日本では百万円程度の贈収賄で、政治家や高級官僚が人生を棒に振ることもあるが、中国における不正蓄財は数百億円に達することもある。つまり、数字の桁が大きく異なるのである。

（３）①さらに、わが国は、歴史的に幾多の国難を国民一丸となった努力で乗り越え、世界有数の平和で安全な社会を築いてきた。

②東日本大震災が発生した際、社会的秩序を保ちながら法を遵守し、お互いに助け合う日本人の姿は、海外メディアなどの賞賛を集めた。怒濤（どとう）のように津波が押し寄せるながて、最後まで避難を呼びかけるアナウンスを続けて亡くなった方もいる。われわれは、東日本大震災発生後の厳しい状況下で、略奪行為などが起きなかったことに誇りを持つべきだ。

③ 1690 年に来日した、ドイツ出身の医師・博物学者であるエンゲルベルト・ケンペルは、「日本人ほど礼儀正しく振る舞う国民は世界中どこにもいない」との言葉を残している。こうした日本人の美徳は、300 年以上経ったいまでも失われていないのである。

３．日本人の強み③…世界一の勤勉さ繊細さ

―第三に、日本人は勤勉、繊細である点も、大きな強みになっている。―

（１）①わが国では、二宮金次郎の時代から、勤勉であることを尊しとする習慣が、国民の生活に根づいてきた。終戦まで、焚（た）き木を背負って本を読みながら歩いている二宮金次郎の像が、日本中の小学校の校庭に立てられていた。

②勤勉で繊細な国民性を背景に、日本の「ものつくり」は高い技術レベルに支えられており、わが国の「サービス」は間違いなく世界一の水準である。

③たとえば、日本製の蚊帳が、多くのアフリカの人々をマラリア禍から救っているという事実は、意外に知られていない。世界では毎年五億人がマラリアを発症し、年間 100 万人以上の人が命を落としている。現在、日本企業の優れた製造技術は無償で供与され、アフリカでは蚊帳が大量に現地生産されているのである。

（２）①これに対して、中国における将来的な科学技術の発展には、慎重な見方が多数派だ。

②たとえば、英国の「エコノミスト」編集部が著した、『2050 年の世界 英「エコノミスト」誌は予測する』（文藝春秋）は中国に関して、「致命的な欠点として、実験によって理論を検証し、必要ならば旧来の学識を排していくという姿勢を持たなかった」として、科学技術面での弱さを指摘している。

③実際、わが国のノーベル賞受賞者の数は、アジアで突出して多い。

④わが国のノーベル賞受賞者の数は、米国籍の南部陽一郎（なんぶよういち）氏を含めれば 19 名に達する。これに対して、中国の受賞者は 2 名であるが、1 名はノーベル平和賞、1 名はノーベル文学賞で、自然科学分野における受賞者は未だにゼロである。韓国に関しても、ノーベル平和賞受賞者が 1 名いるだけだ。

⑤こうした基礎的な科学技術水準の高さに加えて、日本には、「武士は食わねど、高楊枝（たかようじ）」という美意識がある。「拝金主義」が蔓延する中国とは対照的に、わが国には勤勉に繊細な作業に取り組む多くの国民が存在するのである。

（3）①・そもそも、日本人の繊細さは、どういった要因によって育まれたのであろうか？

・哲学者の和辻哲郎（わつじてつろう）氏は、代表作『風土』のなかで、日本人の繊細さの淵源（えんげん）を「湿気」の多さに求めている。

・ヨーロッパの気候が単調であるのに対して、日本の「湿気」の多さが日本人の気質に細かい濃淡を与えている、という指摘である。

②以下に、和辻氏の文章を引用しよう。

＜東洋と西洋との土地としての相違を最も顕著に感ぜしめるものは「湿気」である。(中略)湿気と温度との相関関係から起こるあのさまざまな現象、―― たとえば夏の夕方の涼しさ、朝の爽やかさ、秋には昼間の暖かさと日暮れ時の肌寒さとの間に気分を全然変化させるほどの烈（はげ）しい変化があり、冬でさえも肌をしめるような朝の冷たさの後にほかほかとした小春日の暖かさが来る―― そういう変化に富んだ現象を我々はヨーロッパにおいて経験することができない＞(和辻哲郎『風土』より引用)

③・日本人は「わび」「さび」「もののあはれ」といった感性を文化・芸術のレベルにまで高めてきた。こうした美意識は、茶道、華道、能などの形で、日本人の生活に着実に根づいている。

・日本人は勤勉で繊細な国民だ。科学技術の面でも、わが国はアジア地域では突出した強みを有している。

・その日本人が丹精込めて行う「ものつくり」や「サービス」は、他国の追随をまったく許さないレベルである。

P230 ～ 236

― 2021 年 7 月 2 日林明夫―